

「ソビエト語」研究の意義と展望

—N.A.クーピナ著『全体主義言語：語彙と言語的反応』(1995)—

高橋 健一郎

現代のロシア語研究の中で近年重要な位置を占めつつあるものの一つに、ソビエト時代のロシア語を批判的に分析する研究、いわゆる「ソビエト語研究」がある。ここで取り上げる N.A.クーピナの『全体主義言語：語彙と言語的反応』(Купина 1995)はその中で、今のところ最も体系だった大掛かりな著作である。この著作の内容は、すでにトマルキン(1996)や桑野(1997)によって簡単に紹介され、的確に評価づけられているので、ここではそれらとの重複をなるべくさけ、もう少し広い文脈においてその意義と価値を考えると同時に、さらにクーピナの研究を含めた「ソビエト語研究」が、今後いかに展開され、いかなる可能性をもち得るかについて、「書評」の枠をこえて幅広く考察してみることにはしたい。

1

20 世紀の世界史的出来事の中で恐らく最も大きなものの一つであるソビエト国家の形成は、一体どのようにして成し遂げられたのだろうか。これまで、ボリシェビキが権力を掌握し、国家を建設していく社会的、経済的プロセスの解明には多くの研究者が携わってきた。また、ソビエト国家の基盤となっているマルクス・レーニン主義の思想的、哲学的観点からの研究も多い。しかし、社会、経済制度や思想、哲学だけで国家が成立するはずはなく、そこには必ず、民衆をいかに国家に組み込み、いかに彼らに帰属感を与えることができたのかという問題が横たわっている。この問題はソビエト国家という「全体主義」国家だけに固有の問題ではなく、近代のあらゆる国家につきものの問題であり、そこに必ず付随するのが「言語」の問題である。ここで、少しソビエトの外に目を向け、簡単にその問題に触れておきたい。

まず注目したいのは、フランス革命に関する歴史学の研究において 1970 年代末ごろから、それまでの経済・社会構造、人口の変動などの分析から「文化史研究」へと関心に移りつつあることである。例えば、リン・ハントの研究『フランス革命の政治文化』(ハント 1989 [1984])は、フランス革命は社会・経済的なものではなく政治的なものであり、その本質は新しい「政治文化」の創造で

あった。そしてその「政治文化」とは言語（レトリック）を初めとする様々なシンボルや儀礼の実践などによって構成されるとされ、レトリックや様々な象徴形式の分析が試みられている。フランス革命のレトリックに関するハントの次のような主張は極めて重要な視点を示している：「フランス革命期の言語はたんに革命期の変化や闘争の現実を反映するものではなく、むしろそれじたいが政治的・社会的変化の手段に変わった。この意味で、政治的言語はただたんに、その下に横たわる社会的・政治的利害によって決定されたイデオロギー上の立場の表現ではなかった。この言語じたいが、利害の認識を、それゆえイデオロギーの発展をかたちづくるのに寄与したのである」（ハント 1989：47-48）。

次にドイツ史研究に目を転じれば、ジョージ・モッセの『大衆の国民化—ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』（モッセ 1994 [1975]）が興味深い研究を提示している。モッセは「ヒトラーの成功はどのように説明されるのか」という問いを投げかけ、それに対して、歴史を「シンボル史」ととらえ、シンボルや神話が構成するドラマとしての「新しい政治」を分析することを通して答えようとする。ヒトラーの成功は決して民衆を騙し操るプロパガンダの技術（のみ）によるのではなく、民衆がドラマとしての政治の中に自らの役割を積極的に見出すことによって達成されたとされる。

ここで取り上げた二つの研究はそれぞれ異なった対象を取り上げ、異なる背景をもつものである。しかし、これらに共通する主張を抽出すれば、それは、国家とは社会制度、経済制度の変革のみによって成立するのではなく、言語を初めとする様々な記号の実践によって新しい世界が構築され、その中に民衆は半ば強制的に、半ば自発的に入り込んでいくということである。このように、国民・国家の成立の研究において、美学、記号論その他さまざまなアプローチが可能であり、特に言語に話を限った場合、「言語科学」からのアプローチの必要性が近年意識されてきていることは注目に値する。

同様の視点はソビエト研究にも可能であるし、また必要であろう。例えば、佐藤（1997）は、20世紀初頭にボリシェヴィキの間で生じた「建神主義」を論じながら次のように述べている：「建神主義がボリシェヴィキにあたえたのは、ひとつは、自然を克服する新しい集団主義的な人間をつくらねばならないという人間改造の理念であり、もうひとつはその際、シンボルや儀礼をもちいて大衆の感情にうったえるという手法なのである。[...] 今後、ボリシェヴィズムやソヴェトのイデオロギーを研究するうえで、祝祭や儀礼、シンボルの分析が必要とされるであろう」（佐藤 1997：173-174）。また、石井（1995）は言葉

のはたらし自体には決して意識的ではないものの、19世紀的な「パクス・ブリタニカ文明」に対抗するものとしての「ソ連文明」がレトリック＝シンボルによって構成されたという視点を打ち出している点には注目しておきたい。ケーピナの著作に代表される「ソビエト語研究」は、ソビエト社会を構成する言語の様態（言語態）の分析を通して社会の仕組みを読み解こうとする試みであり、新しいソビエト研究の一つの流れとして大きな意義を有するものと言えるだろう。

2

ここで簡単に、ソビエト時代のロシア語についての研究史を振り返っておきたい。まず、かなり以前より、社会学の立場からソビエトの新聞の言葉に対してアプローチした「内容分析」(Content analysis)¹と呼ばれる研究が存在する。その先駆的な研究はハロルド・D・ラスウェルによるもので、彼は言語と政治の問題を精力的に扱い、例えばソビエトのメーデーのスローガンの分析などを行っている (Lasswell et al. 1965 [1949])。ラスウェルは、「文体の研究は重大な政治的傾向の解釈の問題に対して非常に大きな貢献をすることがある。[...] 文体を装飾として片づけてはならない。[...] 文体はコミュニケーションのあらゆるプロセスにおいて、意味を作り上げる必要不可欠な特徴なのである」 (Lasswell et al. 1965 : 38) と述べ、言語の形式と意味は切り離せず、政治コミュニケーションの問題に関して「文体」の分析が必要であるという認識を示している。

日本でも社会学の立場からの研究として、辻村明による『プラウダ』の社説の内容分析がある。辻村はスターリンの死んだ1953年を起点としてその後五年ごとに『プラウダ』の社説の内容分析を行い、ソビエト社会の大衆化を著しく促進したフルシチョフ時代が、新聞紙面のうえでも極めて顕著な特徴をあらわしているとともに、フルシチョフ執政十一年間の前期と後期の間にも大きな変化があることを示している (辻村 1967)。

しかし、このような「内容分析」は確かに部分的に「文体」を扱ったものではあっても、その分析の手法はどうしても表面的で単純なものになりがちである。例えば辻村の分析では、1.社説で採り上げているテーマが国際問題であるか国内問題であるか、2.国内問題の内訳はどうか、3.社説でとりあげられる事象に対して社説がどのような批判的な関係をもっているか、4.見出しが動的（命

¹ 「内容分析」に関しては、クリッペンドルフ (1989 [1980])を参照。

令動詞、動きを示す前置詞など)か静的(名詞句、文章形、動きを示さない前置詞など)であるか、5.政治的指導者の名前が何回出てくるか、という五点が分析され統計処理されるのみであり、言語学の緻密さを生かしたものは到底言えない。統計処理を前提とした研究では緻密な細かい文体分析は期待できない。

一方、言語科学の立場から、ソビエト社会における言語の役割、特性、機能などの問題を扱った研究もある。例えば、フランスに亡命したミシェル・エレルは、その『ホモ・ソビエティクス—機械と歯車—』(エレル 1988 [1985])においてソビエト史を「ソビエト人(ホモ・ソビエティクス)」形成史ととらえ、その形成のために用いられた様々な「道具」を分析している。その道具の一つが「ソビエト語」である。エレルによれば、ソビエト国家が人間を変革し、体制に組み込んでいくために用いた最大の武器は「言葉」であった。エレルは、ソビエトの言葉は魔法の性質をおび、呪文のようなものになったといい、その魔法の輪の中にソビエトの民衆は組み込まれていったと主張する(エレル 1988: 334-335)。そのような研究においてよく引き合いに出されるのがジョージ・オーウェルの『1984年』(Orwell 1949)である。この小説ではオセアニアという架空の全体主義国家が描かれるが、そこではイングソック(=イギリス社会主義)のイデオロギー的要求に応えるため、つまり独立した思考を廃止し、人々が異端的な思考を表現したり、あるいは、そもそも考えつくことができないようにするため、ニュースピーク(新語法)と呼ばれる言葉が人工的に作り上げられる。そこには、国家が単語の意味を支配して国民の思考をイデオロギー的にコントロールする、という考え方が根底にあり、ソビエト語の批判的研究の多くは、程度の差こそあれ、この考え方を共有している。例えば、Басовская(1995)、Гаджиев(1992)、Земская(1996)、Хан-Пира(1991)、Demaitre(1966)、Sinyavsky(1990)、内村(1989)などは、同様の認識に基づいて「ソビエト語」という「ニュースピーク」のソビエト版の現象について述べている。

上の一連のソビエト語研究では、若干の具体例の他は基本的に一般的な議論が与えられるのみであるが、具体的な体系的分析を目指した研究も若干存在する。イギリスに亡命したイリヤ・ゼムツォフはエレルと同様の考え方にに基づき、ソビエト社会での語彙の意味の変化を辞書形式で跡付けている(Земцов 1985)。また、Hodgkinson(1954)も辞書形式でソビエト語の語彙について説明を与えている。語彙レベルにとどまらず、レトリックのレベルでの特徴について、反体制的な言葉も含めて簡潔に、かつ的確にまとめているのはトマルキン(1994)である。また、かなり大掛かりな著作としてはYoung(1991)があり、そこでは

ソビエト語だけでなく、オーウェルのニュースピーク、ナチス・ドイツの言語、中国共産党の言語などについて、語彙、文法レベルで幅広い分析がなされている。

また、必ずしも体系的ではないが、個別のテーマで言語学、文体論などの成果を駆使した相当緻密な分析もある。筆者は残念ながら未見であるが、『言語学の諸問題』誌 («Вопросы языкознания») に掲載されたクラスヒンによる詳しい書評 (Красухин 1991) によれば、スイスのロシア語学者セリオは、ソビエト共産党第 22 回党大会におけるブレジネフの演説と第 23 回党大会におけるフルシチョフの演説を一つずつ取り上げ、そのテキスト構造、文法特徴などのレベルで詳細なレトリック分析をしている (Seriot 1985)。その他、旧ソ連で初めて 1989 年末から 1990 年初頭にかけてモスクワ大学のジャーナリズム学部で「全体主義社会の言語」(Язык тоталитарного общества) というセミナーが開催されたほか、1991 年 4 月にも「言語と権力、権力の諸言語」(Язык и власть, языки власти) という会議がロシア国内で開かれ²、1994 年にもウクライナのキエフで同様の「全体主義社会の言語：語彙、シンタクス、プラグマティクス」(Мова тоталітарного суспільства: лексика, синтаксис, прагматика) というセミナーが開催されるなど³、ソビエト社会における権力と言語に関する個別研究(例えば「呼びかけ語」の変化の研究など) が蓄積されつつある。

このような研究の流れにあって、クーピナの著作 (Купина 1995) が際立っているのは、その著しい体系性である。従来の研究の多くが、著者が恣意的に選んだ語彙や表現を羅列するという方法を選んでいたので、クーピナは第 1 章「イデオロギー素の語彙と新しいロシア語イデオロギーの意味論的領域」(Словарь идеологем и семантические сферы новой русской идеологии)において、スターリン時代に出版されたソビエト最初のロシア語辞書であるウシャコフ編纂の『ロシア語詳解辞典』(Толковый словарь русского языка)を主要な資料とし、イデオロギー素たる語彙を網羅的に分析する。クーピナは「全体主義言語」形成の一般的な傾向として次のようなものを挙げている：概念レベルにおけるイデオロギーの意味的構成要素の退化、置換、変形；人工的あるいは擬似的イデオロギー素の形成；語彙の価値論的な直線的二極分化；イデオロギー的ドグマを体系的に強化する同義・反義語群の発達；イデオロギー的規範を反映する、ロシア語に馴染みのない語彙結合のコード化 (Купина 1995 : 15)。そして、そ

² Михеев (1991)にその報告がなされている。

³ Яворська (1995)にその報告に基づいた論文が収録されている。

これらのイデオロギー素が政治、哲学、宗教、倫理、芸術の各分野にいかに入り込んでいるかについて克明に記されている。これらのイデオロギー素は、共産党史、新聞、レーニンやスターリンなどの指導者の演説、あるいは作家や学者などの権威ある公式的な「先行テキスト」(прецедентные тексты)に補強され、これらに基づいて「ソビエト神話」が生み出されていた。

第2章「イデオロギー素の超テキスト」(Сверхтекст идеологем)においては、イデオロギー素のリストを「超テキスト」(сверхтекст)⁴と見なし、そのいくつかのカテゴリーに対して一般的な特徴づけをしている。ソビエト時代のイデオロギー素の超テキストは一貫性をもつ統一体をなす。例えば、「時間」というカテゴリーに関していえば、超テキストにおいては「時間の動きは一方向的動き、つまり共産主義の未来に向かった動き」(Купина 1995 : 60) というように特徴づけることができる。

クーピナの著作でさらに重要なのは、このようなソビエト国家の公式的な言語のみならず、それに対抗して存在した「反全体主義言語」を扱っているという点である。具体的には、第3章「言語的反応」(Речевые реакции)において、ラーゲリの詩やアネクドート、イーゴリ・グベルマン(Игорь Губерман)の作品などが扱われている。

このように、クーピナの研究は従来の個別的、散発的な研究を脱したものであり、体系性を有した包括的なものである。その意味で、このクーピナの著作は画期的であり、高く評価すべき重要なものと言えるだろう。しかし、この種の学問的な研究はまだ始まったばかりである。このクーピナの研究をもってしてソビエト語研究が終了したというわけではもちろんない。そこで次に、今後のソビエト語研究の展望について考えてみたい。

3

クーピナの研究において、その体系性・包括性への指向ゆえに逆に犠牲になっているように思えるのは、例えば Seriot (1985)が部分的に示しているような言葉の微妙な動き—例えば動詞の名詞化、語彙化、前提表現など—がもつイデオロギー性に対する細やかな意識である。言葉のもつ微妙な、しかし重要な

⁴ クーピナの定義によれば、「超テキスト」とは「発話、テキストの総和であり、時間や空間において限定され、内容や状況の上ではまとまりがあり、一貫したモダリティーの志向によって特徴づけられ、発信者と受信者の立場が十分にはっきりしており、規範的なものと非規範的なものについて特別な基準があることで特徴づけられるものである」(Купина 1995 : 53)。

たらきに関して言語科学が練り上げてきた一連の分析モデル—詩学、修辞学、文体論、談話分析、物語学、テキスト言語学、語用論など—はソビエト語分析にも有効ではないだろうか⁵。

ソビエト語研究とは別の流れで、このような言葉のはたらきとイデオロギ―との関係について問う研究は、言語学や文体論の分野で近年かなり出されるようになってきている。例えば、1970年代末にイギリス（とオーストラリア）の言語学者を中心にして起こった「批判的言語学」(Critical linguistics)あるいは「批判的言説分析」(Critical discourse analysis)と呼ばれる一連の研究がある。そのきっかけとなったのは、共に1979年に出版された Kress&Hodge (1979)と Fowler et al. (1979)であり、そこではメディアにおける言語とイデオロギ―の関係が言語学の立場から詳細に論じられている。これらの研究は、例えば一つの事件についての異なる新聞記事のメッセージの文法構造を緻密に分析し、事実の記述におけるイデオロギ―的屈折を明るみにすることなどに成功している。これらの研究に続いて多くの批判的言語研究が出されてきたが⁶、それらに共通する前提は、社会構成や社会関係が人々の言語活動に影響を及ぼすだけでなく、社会的に規定された言語パターンが認知活動を含む非言語活動に影響を及ぼすということである。そして、一般的な「社会言語学」(Sociolinguistics)がもつばら社会的コンテキストに置かれた言語の「記述」に重点を置き、また一般的な「談話分析」(Discourse analysis)もやはり言語使用域 (register) と言語表現の間の相関関係などの「記述」を中心的に行っているのに対して、「批判的言語学」はそれをイデオロギ―や権力の問題に結び付けるところが際立っている。では、イデオロギ―的な言説のレトリックは具体的に言語のどのようなレベルで分析され得るのだろうか。「批判的言語学」の流れに属する著作である Fairclough (1989) は、テキストの諸特徴の分析に際し、語彙、文法、テキスト構造の様々な点に目を向けるよう指示している。いくつか例を挙げれば、メタファー、代名詞、名詞化、アスペクト、モダリティー、文の連結、その他である。このように、イデオロギ―が関係する言語レベルは、語彙・語彙関係やメタファー、文法構造の諸特徴、文と文の連結、テキストのマクロ構造に至るまであらゆるレベル

⁵ 「ソビエト語」の一部を担うソビエト小説（社会主義リアリズム小説）をプロップ流の物語構造分析の手法で分析した Clark (1981)は、一般的なソビエト語分析にも応用可能であろう。

⁶ 「批判的言語学」、「批判的言説分析」の文献に関しては、Hodge& Kress (1993 [1979])の巻末の文献表が詳しい。

に及ぶ⁷。この「批判的言語学」はその他の言語学を否定して全く新しいオルターナティブとして存在しているわけではなく、当然ながら様々な言語科学の成果を利用している。このような緻密な言語分析の成果を積極的に取り入れていくことがソビエト語研究の今後の一つの方向性として必要であろう⁸。

また、ソビエト語研究で忘れてはならないのは、クーピナが丁寧に記しているように、ソビエト国家には公式的な言説以外に、さらにそれに対抗する反体制的言説、反全体主義言説も存在したことである。しかし、それが「体制」対「反体制」という単純な図式で語り尽せるかどうかということは慎重に考察しなければならない。一見「反体制的」な言説であっても、単に体制の公的言説の前提を強化するだけだったり、さらにより「全体主義的」な物語へと回収されていくことはないのだろうか。これらはまだまだ考察を必要とするテーマであろう。

4

しかし、はたしてこのような言葉そのものののはたらきだけがソビエト語のもつ力なのだろうか。例えば、クーピナの研究が一般化・体系化して明らかにしてみせるソビエト語の独特な意味の世界は、いかにして民衆を巻き込んでいくのか。ロシア革命時には弱小な勢力に過ぎなかったソビエト権力の言説が、広大な国土を覆い、民衆全体をソビエト語の世界へと組み入れていくそのダイナミズムは、クーピナの著作からも、他のソビエト語研究からもあまり伝わってこない。

このような問題については、例えばピエール・ブルデューの『話すということ—言語的交換のエコノミー』（ブルデュー 1993 [1982]）が示唆的である。言語体系の自律性を唱えるソシュール派言語学へのアンチテーゼとして、徹底して言語の社会性、政治性を主張するブルデューは、テキスト内在的研究から、言語使用をとりまく社会性・政治性・歴史性の問題へとわれわれの目を向けさせる。そしてそれはソビエト語研究にとっても極めて重要な側面であるように

⁷ ほかに、例えばヤコブソンは言葉の「詩的機能」(poetic function)の例として、1958年当時のアメリカ大統領選でのアイゼンハワー側の政治的スローガン“I like Ike.”を取り上げ、その音韻構造におけるパラリズムにキャッチフレーズの力を見ているように(ヤコブソン 1973 [1960]: 193)、「音韻構造」のレベルも考慮に入れる必要がある場合もある。

⁸ 拙論(高橋 1998a)は、「メーデー」というテーマをめぐる具体的ないくつかのテキストを、そのテキスト構造・文法レベルを中心として分析した一例である。

思われる。

ブルデュー（1993）における問題の中心は、正統的な規範化された言語がいかにかに形成されるかというものであり、フランス革命後のフランス語についての議論から出発する：「共同体の特有言語やお国訛を排して、正統＝適法の言語を認定＝強制することは、大革命によって獲得された成果を永遠のものにするために、新たな人間を生産し再生産しようとする政治戦略の一部をなす。[...] 革命的インテリゲンチアのフランス語と、さまざまな特有言語やお国訛との間に存在した衝突は、心的構造の形成＝養成と再形成＝更生を賭けた、象徴的権力を求めての抗争である」（ブルデュー 1993：41）。ここで一個所「フランス語」を「ロシア語」に替えると、それはロシア革命後のロシア語をめぐる問題と読むことも可能である。ブルデューにとっての問題の領域は「ラング」の体系ではなく、「言語の使用」をめぐる社会的、政治的な編制そのものを解読するところにある。ブルデューにとって正統言語とは、決して抽象的で所与のものではなく、政治的に文字通り「製造」されるものなのである。「ソビエト語」もまた、ソビエト国家の正統言語として政治的、社会的に編制され、社会の言語階層構造において支配的な地位を獲得したものと考えられる必要があるだろう。

ブルデューによれば、「公用言語は、その生成起源においてもまたその社会的用法においても、国家と強固に結ばれている。公用言語によって統一され支配＝制御されたひとつの言語市場というものが構成されるための諸条件が生み出されるのは、国家の構成過程においてである」（ブルデュー 1993：38）。具体的には、「正しい表現」という模範が、文法学者たちの体系化の労働によって構成され、教師たちの教育的労働によってはっきりと教え込まれ、文学者たちの実践的に卓越した技法による語りによって価値を高められていく。そうして打ち立てられる正統言語という正統な象徴財を民衆はみずから獲得しようとするものであり、それは、長くゆったりとした獲得過程を通し無感覚のうちに教え込まれるものである。ここでブルデューが示しているのは、言葉の使用そのもの、言葉を語り書くという社会的実践そのものが権力であり、言語使用そのものの編制において政治がいかにかに組み込まれているか、ということである。このような視点にたつと、ソビエト語研究は新たな問いの地平へと開かれていく。ソビエト社会においていかにかに「正統言語」が打ち立てられ、いかにかに民衆に教え込まれたのか—そこに目を向けるとき、必然的にわれわれは「社会学」と手を結ぶことになる。

例えば、クーピナのようにソビエトの公式辞書における意味世界を分析するのであれば、それと同時に、辞書が整備されることそのもの（さらに言えば「言

語学」自体)のイデオロギー性についても考えるべきだろう。文盲が民衆の大部分を占めるような状況において、正書法が整えられ、辞書が作成され、文法が一般大衆にも教えこまれ、書き言葉が整備される—そして「言語の標準化＝規範化」が進み、民衆は規範化された「文字の世界」へと入り込んでいくことになる。そのこと自体がすでに、言葉をめぐる権力の発現であることに無意識であってはならないであろう。

さらに、ベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体』(アンダーソン 1987 [1983])において、新聞や小説というマス・メディアが国家的なものを想像可能にしたと主張し、それよりも以前にマクルーハンの『グーテンベルクの銀河系』(マクルーハン 1987 [1964])が、活版印刷の普及こそ国民国家を成立させたと主張する—国家とメディアの結びつきに関するこれらの主張は、ブルデューの議論を補完するものとしてソビエト語研究と関わってはこないだろうか。また、「著者は、書物を書くのではない。そうではなくて、かれらはテキストを書くのである」(シャルチエ 1992: 14)と主張し、「言語テキスト」そのものより、むしろ書物の物質性に注目し、人々の「読書行為」の変容に着眼するいわゆる「読書の社会史」なるものもソビエト語研究の射程には入らないだろうか。例えば、レーニンは『なにをなすべきか?』(レーニン 1971 [1902])の中で、プレハーノフの定義をふまえて「宣伝家」と「扇動家」の違いについて、「宣伝家は、主として、印刷されたことばによって、扇動家は生きたことばによって、活動する」(レーニン 1971: 103)と述べ、宣伝／扇動という二段階のコミュニケーションのあり方を指示している。この二段階のモデル自体が適切かどうかは別としても、ソビエト語が多様なコミュニケーションの経路において語られ、人々の受容の仕方が決して一様でなかったのは事実である⁹。ソビエト国家の成立と平行して正統言語が権威づけられ民衆に教え込まれる過程は、まさにこのように様々なメディアの編制と手を取り合いながら進展したことを考えるときに、これらの「メディア」をめぐる一連の問いがソビエト語研究にも深い関わりをもつことは明らかであろう¹⁰。

⁹ 例えば、一口に「公的言説」とは言っても、少数の活動家に向けられた非常に理論的な公的新聞・雑誌と、一般大衆レベルで広められたポスター、革命歌曲などの言説は性質が異なるだろうか。また、同じ新聞のテキストであっても、口頭扇動者が文盲農民を集めて読んで聞かせるという集団での読みの形態もあれば、一人一人が自室で黙読するという形態も存在した。その差はいかなる意味を持ち得るだろうか。

¹⁰ 拙論(高橋 1998b)は、このような点をふまえて、革命後ロシアにおいて全民衆が国家的な物語を共有するための社会的・技術的条件が整えられ、全国家的な言説共同体が形成される様子を考察した一つ

このように、「ソビエト語研究」ももはやそれほど簡単な図式では語れず、かなりの広がりをもち、様々な問題と関わってくるのがわかる。クーピナのように「ソビエト語」の共通項を見つけ、その全体像を体系化・一般化して示すのはもちろん必要なことではある。しかし「ソビエト語」と称されるものが実はそれぞれの瞬間において発せられた個別の「出来事」であり、様々な環境と関わりあいながらその力を発揮していたのであれば、その研究もまたその個別的な発話の状況を考慮に入れて展開されたときに、より一層の成果を見ることができだろう。もちろん、そうはいっても、ソビエト社会で語られた言説をすべてその個別相で捉えることはそもそも不可能なことである。現実的な研究のストラテジーは、ソビエト社会におけるある適切なコミュニケーション・モデル（非公式的コミュニケーションも含む）を立てて大まかな言説の編制様式を捉え、ある出来事をめぐる言説がそのコミュニケーション経路においていかに語られるかを視野に入れつつ、言語科学の成果を取り入れた言説分析を積み重ねていくことであろう。管見の限りでは、まだそのようなソビエト語研究は出されていない。

* * *

「ソビエト語研究」が前提とするのは、言葉とは単に社会を反映しているというだけではなく、むしろ言葉を用いるという行為が社会を構成するということである。初めに触れた歴史学における言語態分析への強い関心からも分かるように、社会を構成する言語態の分析はその社会を読み解く上で不可欠なものである。ソビエトのような全体主義国家ならずとも、あらゆる共同体は多かれ少なかれその社会に関する安定した語りを必要とするものであり、言説の統制、固定化は至る所で見られる。それゆえ、ソビエト全体主義の言語態の分析の経験は、他の様々な共同体が語る言説を分析する際にも応用可能となるだろう。そのような意味でも、ソビエト語研究はロシア学における極めてアクチュアルな課題の一つであることは間違いない。

の試みである。

【参考文献】（本文・注で言及・引用したものに限る）

- Басовская, Е.Н. (1995) "Художественный вымысел Оруэлла и реальный советский язык" // *Русская речь*. 1995, №4.
- Гаджиев, К.С. (1992) "Тоталитаризм как феномен XX века" // *Вопросы философии*. 1992, №2.
- Земская, Е.А. (1996) "Клише новояза и цитация в языке постсоветского общества" // *Вопросы языкознания*. 1996, №3
- Земцов, И. (1985) *Советский политический язык*. London: Overseas publications Interchange.
- Красухин, К.Г. (1991) [Рецензия на *Analyse du discours politique soviétique*. (Seriot P.)] // *Вопросы языкознания*. 1991, №6.
- Купина, Н.А. (1995) *Тоталитарный язык: Словарь и речевые реакции*. Екатеринбург—Пермь, Изд-во Урал. ун-та.
- Михеев, А.В. (1991) "Язык тоталитарного общества" // *Вестник АН СССР*. 1991, №8.
- Хан-Пира, Э.И. (1991) "Язык власти и власть языка" // *Вестник АН СССР*. 1991, №4.
- Яворьска, Г.М. (1995) *Мова тоталітарного суспільства*. Київ.
- Clark, K. (1981) *The Soviet Novel: History as Ritual*. Chicago: Chicago U.P.
- Demaitre, E. (1966) "Communist Semantics" / *Communist Affairs*. Vol.4, No.1.
- Fairclough, N. (1989) *Language and Power*. London / NY: Longman.
- Fowler, R. et al. (1979) *Language and Control*. London.: Routledge and Kegan Paul.
- Hodge, K. and Kress G. (1993 [1979]) *Language as Ideology*. (2nd ed.) London / NY: Routledge.
- Hodgkinson, H. (1954) *The Language of Communism*. NY: Pitman Pub. Cor.
- Lasswell, H.D., Leites, N. and Associates. (1965 [1949]) *Language of Politics: Studies in Quantitative Semantics*. Cambridge / Massachusetts: The M.I.T. Press.
- Orwell, G. (1949) *Nineteen Eighty-Four*. London.
- Seriot, P. (1985) *Analyse du discours politique soviétique*. P.: Institut d'études slaves.
- Sinyavsky, A. (1990) *The Soviet Language / Soviet Civilization: A Cultural History*. Trans. by J. Turnbull, NY: Arcade Publishing.

- Young, J.W. (1991) *Totalitarian Language: Orwell's Newspeak and Its Nazi and Communist Antecedents*. London: U.P. of Virginia.
- アンダーソン, B. (1987 [1983]) 『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』白石隆、白石さや訳、リプロポート (B. Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London, 1983)
- 石井規衛 (1995) 『文明としてのソ連—初期現代の終焉』山川出版社
- 内村剛介 (1989) 「ソビエト的人間と共産主義—現代の言語変質について—」
／『文化会議』1989年3月号
- エレル, M. (1988 [1985]) 『ホモ・ソビエティクス—機械と歯車—』
辻由美訳、白水社 (M. Heller, *La machine et les rouages: La formation de l'homme soviétique*. 1985.)
- クリッペンドルフ, K. (1989 [1980]) 『メッセージ分析の技法—「内容分析」への招待』三上俊治、椎野信雄、橋元良明訳、勁草書房 (K. Krippendorff, *Content Analysis: An Introduction to Its Methodology*. 1980)
- 桑野隆 (1997) 「全体主義と言語学」／田中克彦他編『ライブラリ関連社会学
言語・国家、そして権力』新世社
- 佐藤正則 (1997) 「建神主義—ボリシェヴィキの精神」／『現代思想』
1997年4月号
- シャルチエ, R. (1992) 『読書の文化史—テキスト・書物・読解』福井憲彦訳、
新曜社
- 高橋健一郎 (1998a) 「ソビエト国家の『闘争の物語』の生成レトリック—1920年代『プラウダ』紙のメーデーの社説の言説分析—」／日本記号学会編『聲・響き・記号 (記号学研究 18)』東海大学出版会 (近刊)
- 高橋健一郎 (1998b) 「革命後ロシアの全国家的言説共同体の形成について」
／東大言語情報科学研究会『言語情報科学研究』No.3 (近刊)
- 辻村明 (1967) 『大衆社会と社会主義社会』東京大学出版会
- トマルキン, P. (1994) 「ソ連語よさらば」／『窓』90、ナウカ
- トマルキン, P. (1997) 「クーピナ著『全体主義国家の言葉—語彙・表現、スピーチによる反応』」／『窓』98、ナウカ
- ハント, L. (1989 [1984]) 『フランス革命の政治文化』松浦義弘訳、平凡社
(L. Hunt, *Politics, Culture and Class in the French Revolution*. 1984)
- ブルデュー, P. (1993 [1982]) 『話すということ—言語的交換のエコノミー』
稲賀繁美訳、藤原書店 (P. Bourdieu, *Ce que parler veut dire: l'économie*

des échanges linguistiques. 1982)

マクルーハン, M. (1986 [1962]) 『グーテンベルクの銀河系—活字人間の形成』 森常治訳、みすず書房 (M. McLuhan, *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*. Toronto, 1962)

モッセ, G.L. (1994 [1975]) 『大衆の国民化—ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』 佐藤卓己、佐藤八寿子訳、柏書房 (G.L. Mosse, *The Nationalization of the Masses*. NY, 1975)

ヤコブソン, R. (1973 [1960]) 「言語学と詩学」 / 『一般言語学』 川本茂雄監修、みすず書房 (R. Jakobson, “Linguistics and Poetics” 1960)

レーニン, V.I. (1971 [1902]) 『なにをなすべきか?』 村田陽一訳、大月書店 (В.И. Ленин, *Что делать?* 1902)